

松村通信第 1 5 7 号

2 月 16 日

松村勝弘

人間になるということ

近況 今年の 1 月はあっという間に終わってしまいました。この寒さですから、朝もなかなか布団から出られません。まさに、ぐうたらしています。2 月 1 日は RIMO おけいはん R7 新年会、そして 2 月 16 日は住野公一さん喜寿を祝う演奏会、などなど、やっぱり校友つながりの会が続きます。先月もそうでしたが、リタイヤ後、校友つながりが行動の中心になっています。とりわけ、2 月 1 日の RIMO おけいはん R7 新年会では、ふぐのコースを頂きました。ちょうど 1 月 6 日の喜望大地新年会もふぐコースだったのですが、その時残念ながらひれ酒ができなかったのですが、今回はそれを頂くことができました。まさにひれ酒のリベンジです。



あとは、気ままな読書をしています。専門領域から大きくはみ出た読書が多いです。哲学的な読書が多いです。それは私のフェイスブックで書いている「今日の一言」を見てもらっても分かると思います。前号で human being から human becoming へと人間が成長するということを書きましたが、須藤孝也『人間になるということ ― キルケゴールから現代へ』(以文社、2021 年) などという本は、まさにその名の通り、人間になる (human

becoming) ことについて書いた本です。ちょっと難しかったのですが、これに関連して書いてみたいと思います。

キルケゴール 須藤孝也氏のこの本は、その副題が表すように、また前書きでも言われるように、「キルケゴールを参考にしながら、人間になるということはどういうことなのかを考えるのが本書の目的である」(7 頁) という。それはしかも、日本の現状をよしとしてではなく、その変革を目指している。すなわち「現状が変わるためには、人間が変わるの でなければならない。私たちが変わるの でなければならない。人間らしく生きたいと望む ことによって、現状の問題点を捉え、それを 改善しようとする人間になるのでなければなら ない」(同上) というわけである。

キルケゴール (1813 ~ 1855) は、実存主義の創始者ないしはその先駆けと評価されている。キリスト教国デンマークにおける敬虔なキリスト者として、数多くの著作をものしている。18 世紀の西ヨーロッパで興った啓蒙思想が 19 世紀にも盛んであった。キルケゴールはこれに疑問を呈したのであった。啓蒙主義は反キリスト教的であった。そこでは、理性に対する信仰があって、理性で了解される限りにおいてキリストを受け入れるのである¹⁾。普遍性、客観性、合理性、外面性が主張され、個別性、単独性、主観性、内面性、主体性が見失われたと、キルケゴールは主張した。キルケゴールは「客観的思考」に対峙して「主体的思考」を訴え、またアリストテレスにならって、魂のすぐれたあり方(徳)を求める活動を行った²⁾。その問題意識は、現代の我々にも共通するものがある。啓蒙思想は、「世界史の窓」における世界史用語解説を見ると「理性に照らしあわせてみずからの非合理的なものを排そうとした実学であり、歴史や伝統、そして信仰を相対化する普遍主

義であり、知と理性を信じ、現在の文明に自負をもち、未来を楽観する進歩思想」³⁾であるといわれている。神の絶対性を否定する思想である。

普遍性と個別性 これを以前紹介した、村上靖彦『客観性の落とし穴』にならって考えて見ると、わかりやすい。すなわち「実際にがんになるということは、患者それぞれで意味は変わってくる。病とどのように出会うのかは人によって異なり、どのように受け止めるのか、病に対してどう応答してその後の生活を組み立てるのかは、本人の年齢や家族関係や社会関係によって大きく変わってくる。偶然の出来事に対しては、受け止める側の反応も個別的で多様なのだ。同じ診断名の病気であっても一人ひとりのストーリーは異なる。偶然の出来事をめぐって一方では統計学を用いて飼いならそうとする方向性があり、他方で偶然に満ちた人生にストーリーを与えて意味を探す方向性がある。」⁴⁾前者の「統計学を用いて飼いならそうとする方向性」を普遍性といい、後者「偶然に満ちた人生にストーリーを与えて意味を探す方向性」を個別性と言い換えることができるだろう。前者では、人間の主体性は出てこない。後者ではじめて、人々の主体性が問われる。

善い人間になる 「神が不在となれば、人間がすべてとなる。人間が神にとって代わると、人間は横暴になる。多数派が形成する基準に全員が合わせなければならなくなる。[ここでは人間の主体性は発揮しようがない。]多数派が『しかるべき人間』だということになるからである。

キルケゴールは、そうした状況は超越の神が消失することによってできあがると考えていた。各人が神の前に進み出る単独者であれば、裁くのが神であって人間でないことを理解するだろう。……人間の、あるいは自分の正義がごく不完全なものであることを理解するだろう。だが神に関わる単独者がいなければ、そうした状況はあり得ない。もしキルケゴールが現代日本を訪れたとすれば、おそらく彼は人間恐怖の状況を見てとったのではな

いかと思われる。」(62-63 頁) 著者は現代の人間の傲慢さをキルケゴールを借りて指摘している。人間の不完全性を知れば、人間は微力ではあれ、主体性を発揮して、後は神に任せるという選択ができよう。

「人はしばしば悪に満ちたこの世に絶望する。どうしてこんな世界が存在するのかと嘆く。だがキルケゴールによれば、そもそもこの世界を善の世界だと前提するのが間違っているのである。人間は自然的に善いのではない。むしろ『人間になる』前の自然的人間把握なのである。少なくとも絶対的善を欠いている。世界を悪にしているのは神ではなく、人間である。

キルケゴールによれば、人間は善の世界で生きているのではなく、悪の世界に善をもたらすために存在しているのである。」(70 頁) 人間はそのままでは善い人間ではない。善い人間にならなければならないと考える。著者は、キルケゴールに依拠して「人はどのようにして魂を善に向けて生き続けることができるのか」(267 頁)と問うている。これは儒教における孟子の性善説に似ているように思える。性善説では人間は善の可能性はもっている、修養してその本来の力を発揮すれば善人になりうると考える⁵⁾。

現代社会の問題 著者須藤孝也は、キルケゴールの考え方を現代にあてはめて、社会を改革しようとする。現代社会は新自由主義が蔓延し、格差はますます拡大している。まさに、悪に満ちたこの世に絶望せざるをえない。本書の著者はその「後書き」でいう。

「新自由主義の経済により、格差は拡大の一端を辿っている。富の集積点にいるほんの一部の富裕層以外はみな貧しくなっていく。『合理化』が推し進められるなかで、多くの人々がお金、時間、心、すべての余裕を失った。少子化の進行も止まらない。現在、この国は世代継承すらままならない状況にあるのである。長い間人々がそれを中心に生活を組み立ててきた経済単位である『家』も、従来もっていた安定性を失った。

こうした新自由主義経済のグローバル化に

より、格差の拡大は、国内のみならず世界中で進行している。各国の国力は、これまでとは比較にならないペースで開いている。国内で諸個人が無力へと落ちていくように、経済競争に敗れた国もまた主権を失い、ますます強国のコントロールを受けざるをえなくなっていく。」(284 頁)

まさに絶望的である。どうすればよいのか。キルケゴールにならって、ここは人間の善性の発揮が求められる。著者はそう考える。

改革のためには 客観性の名のもとに立ち止まって傍観していても何もよくなるしない。「ありのままに人間を肯定する態度は、ありのままの社会を肯定すること、つまり現状肯定へとスライドする……この国の政治が停滞している理由はそこにあるように私には思われる。」(6 頁) すべての人間が主体的に改善を模索しなければ何もよくなるしない。著者はこう考えてキルケゴールを紹介し、キルケゴールを参考にして、改革を模索しているのであろう。キルケゴールは主体性を主張している。

敗北した者でも「再チャレンジできるよう支えるセーフティネットが必要となるのだが、自助の政治は『経費削減』のために、あるいは『生産性向上』のために、むしろセーフティネットを取り外す方向へと向かっている。そうして現代では、人々は失敗を恐れるあまり、新しいことになかなかチャレンジできなくなった。」(278-279 頁) 著者は、民主主義社会は、こんな状況にある現代を乗り越える力をもっていると考えている。

「民主主義は、本来、人間の可謬性を想定した制度であり、知のセーフティネットを最大限に活用する制度である。だから民主主義はみんなが話し合うこと、話し合いのなかで最善を模索することを求めるのである。……私たちは民主主義を単に多数派を明確化する手続へと劣化させることなく、共同性と個人性との間に化学反応を起こさせる場へと高めていかなければならない。」(281 頁)

民主主義により「善い社会」を目指すためには、「善い人間」にならなければならない。

「二〇世紀半ばにデンマークで活躍したハル

・コックは、……民主主義を私たちが生きるあらゆる人間関係(……)のうちに見だし、『その本質は話し合いと相互の理解および尊重である』と述べた。本書では、人間になるということについて一貫して考察してきたが、この人格の尊厳を解するところの人間になろうとする人間は、こうして他者関係を丁寧に編み上げる民主主義の主体ともなる。人々が自身を人格へと高め、他者のうちに人格を認め、育み、その尊厳に見合った関わりをするとところにこそ民主主義は立ち上がるのだから。」(281-282 頁)

「人間になる」ということは、客観に身を任すのではなく、その人が共同体の政治に参加する。共同体の中で自治の主体となることである。まさにこれが『民主政治』の理念と言ってもよい。」⁶⁾

- 1) 広瀬薫「啓蒙思想によるキリスト教教理の変質」
<https://www.imcj.org/watanabe/18B.html>、1992 年。
- 2) 鈴木裕丞『キルケゴールの生と苦悩に向き合う哲学』ちくま新書、2014 年、36-39 頁。
- 3) <https://www.y-history.net/appendix/wh1003-031.html>
- 4) 村上靖彦『客観性の落とし穴』ちくまプリマー新書、2023 年、115 頁。
- 5) 「朱子学によれば、『道』は私たちの内側に『内なる本性』として備わっている。人は皆、善なる存在として生まれてくる。ところが、人はしばしばバランスを崩し、『内なる本性』を曇らせてしまう。そこで本来の『内なる本性』を取り戻そうとする。それが修養である。修養とは本来の『本性(『本然の性』)』を回復すること。『本然の性』が回復する時、すべてが調和する。朱子学はそう説いた。」(西平直『修養の思想』春秋社、2020 年、40 頁)
- 6) 中野剛志『政策の哲学』集英社、2025 年、300 頁。

HP, FBを見て下さい。又何でも意見を。

皆様のご意見を歓迎します。HP
(<http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/>) もご覧下さい。
フェイスブックもやってます。また、メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい
(matumura@mba.ritsumei.ac.jp)。